平成9年（1997年）12月10日 教皇様の声 （昭和59年10月1日第三種郵便物認可）
12 DECEMBER,1997 毎月10日発行 第212号

教皇様の聲

〈待降節中のお説教〉 警戒して祈ろう！

（恒例となった待降節の教皇さまのローマ市内小教区司牧訪問でのお話。この時がちょうど二五〇回目だった。）

★「来たるべき王である主を拝みに行こう！」

待降節の典礼は、毎日、この呼びかけをもって私たちを来たるべき神の秘義へと誘います。それはキリストの一度目と二度目の到来を指しています。一度目はベトレヘムの夜、神の御子が人となり、おとめマリアからお生まれになった時のこと。二度目は最後の審判の時を指します。長い間この世への神の到来ということについて考えてきた教会は、さらに範囲を広げて、一度目を時の始めの創造の瞬間に、二度目を世の贖いのための託身の出来事において、と考えました。

一度目と二度目の到来はすでに起こったことになりますが、私たちはなおキリストの三度目の到来を待ちつつ生きています。創造と贖いのわざは、その時最後の完成を見るはずです。ただ一度で世の贖いを成し遂げた方は、必ず創造の全て、特に人類の歴史を総括して、あらゆるものをただ神にしか見い出せないあの完成へと導くでしょう。「来たるべき王である主を拝みに行こう！」

★本日の第一朗読では預言者イザヤが、いささか不穏なこの到来について告げています。「主よ、なぜ私たちを道に迷わせ、主を恐れないほど心を固くされるのですか。…ああ、主が天を引き裂き、そして下ってこられたら。み前に山々は震えるだろう。…見よ、主は怒られたが、私たちは罪を犯し、みな汚れた者となり、正義の行ないも、汚れた布のようだった。みな、木の葉のようにしぼみ、風のように悪に運び去られた。」（イザヤ63・17、19、64・4～5）

この鋭い一文が雄弁に語ることを理解するのは簡単です。そこにはある意味で、待降節の神学全体がひそんでいます。預言者は全被造物の名において、創造主である神に呼びかけています。彼は、神に似せて造られた人間の名において語ります。人間は受けた賜物に気づいていますが、同時に自らの罪深さと、罪によって歪んでしまっていることにも気づいています。

神は救い主として、人間に手を差し伸べられる

イザヤは神が人間を救おうとお望みであることを確信していました。神は人間を罪の中に沈めておいたり、原罪の結果である神との分離の状態で放っておかれるつもりはありません。神は救い主として、人間に手を差し伸べようとお考えです。「主よ、愛を示し、救ってください。」（詩篇85〈84〉・8）（…）

「警戒」は待降節中の教会の合言葉

★来たるべき王である主を拝みに行こう！ これは待降節の典礼の最初のメッセージであり、神の到来への期待を表明しています。それに応えて、マルコ福音書は勧めます。来たるべき神・キリストは、ご自分の帰りを待ち望む人々に仰せになりました。「注意し警戒していることだ。あなたたちはその時がいつかを知らぬ。」（マルコ13・33）家を後に、旅に出る主人のたとえ話を考えてみましょう。主人は下男たちにことをまかせ、各自の役目を決めます。キリストはこの役目を万人に当て嵌めました。「警戒せよ。家の主人は夕方帰ってくるのか夜半か、雄鶏の鳴くころか、朝か、誰にもわからぬ。主人がにわかに帰り、あなたたちが眠り込んでいるのを見つける

Libreria Editrice Vaticana, Città del Vaticanoの転載許可済
© 1997

発行所
財団法人■精道教育促進協会
〒659 兵庫県芦屋市船戸町12-6
TEL.0797-31-3452・FAX.0797-31-3448

ことのないように。あなたたちに言うことはまた全ての人にも言う。警戒せよ。」（同13・35～37）

「警戒せよ」…待降節の間、教会は繰り返しこの言葉を告げます。それは主の誕生の夜への嬉しい期待ばかりではなく、ベトレヘムに始まる贖いのわざ全体の完成を待つことでもあります。救いの知らせは、教会と、自分たちがキリストのいけにえによって贖われたことを知る人々に委ねられた使命です。

この自覚は、特別な責任感を養います。これこそ「警戒」という言葉の意味するところです。警戒せよ、主が来られるのだから！　この地上の生命はいつかは終わりますが、同時に四終が始まります。これは第二バチカン公会議の「教会憲章」で強調されていることです。私たちは、キリストが時の終わりに成し遂げられる完成に備えるため召されているのです。（48番参照）

兄弟姉妹の皆さん。警戒し、祈り、待ち受けましょう。全教会と共に、警戒し、祈りましょう。こうして私たちは来られる主を迎える用意ができるでしょう。アーメン！

（九六・十二・一、ローマ市内の教会にて。）

マリアにおいて本来の美しさを取り戻す

（聖母無原罪の御宿りの祝日に当たり、お告げの祈りの時のお話。）

30年あまり前、正確には一九六五年十二月八日、第二バチカン公会議はここ聖ペトロ広場で閉会しました。尊敬する前任者パウロ六世は、この大いなる出来事が呼び覚した数々の期待と希望を聖母マリアに委ねると共に、生活を新たにし、一層の熱意をもって現代人にキリストを宣言することを約束しました。公会議教父の一人として私もあの日のことを思い起こし、深い感動を覚えます。

今日、無原罪の御宿りの大祝日に当たり、祝された処女の助けによって公会議のメッセージに思いをめぐらせ、それに従ってもっと忠実に生きることができるように、という教会の祈りを私も新たにします。聖霊の大いなるわざに強められ、言わば若返って紀元二千年を迎えることができるために。

教会の御母マリアは信者の行く手を導いておられます。キリストの功績ゆえにマリアは原罪のあらゆる汚れをまぬがれ、他の全被造物に先だって、唯一独自の方法で贖われていました。この並み外れた神の御好意によってマリアは神の愛の計画を完全に受け入れることができる者となり、キリストの宿り場・教会の模範としてふさわしくなるため備えられたのです。マリアの内には、神の崇高さと人類に向けられた驚くべき優しさが輝いています。マリアの内に人類は最初の美を取り戻し、神の計画が悪よりも強く、生命と救いの新たな可能性を提示し得ることが明らかに示されます。

今日私たちが祝うこの秘義は、何とすばらしい地平線を開いてくれることでしょう。時には熱烈にまことの尊厳を捜し求める現代女性に対して、「美そのもの」であるマリアは、女性の資質が恩寵に浸されれば偉大な可能性が開けることを示しています。

将来に不安を抱く青少年に対しては、神は決して個人の深い期待を裏切ることはなく、兄弟愛と連帯に満ちた世界を築こうと望む全ての人に手を差し伸べておられることを思い起こさせます。

悪に沈みながらも善に憧れる人々に対して無原罪の御方は、心から真理を求め、信頼して神の手に身を委ねるなら、実際に贖われることが可能であると教えてくれます。

身体や心の病に苦しむ人、歴史に打ちひしがれた人々に対しては、処女マリアは生命の神を宣言します。神は、世を歪める罪の重荷にも拘わらず、ご自分の子供たちを喜びと自由へと招いておられます。

無原罪の処女を、その誕生と模範を黙想する教会は、自らが神のわざそのものであり、疑いと誘惑に満ちたこの世で「しみもしわもなく、輝くばかりに美しいキリストの花嫁」（無原罪の序唱）であれという崇高な召し出しを受けていることを再発見します。

クリスマスを待ち望む時である待降節に当たり、本日の典礼は私たちもまた「聖なる者、汚れのない者」（エフェゾ1・4）として呼ばれていることを思い出させてくれます。聖性に招かれた私たちを、聖母が助けてくださいますよう。具体的な希望と愛のしるしを世に与えるため、さらに寛大に主にいのちを委ねる私たちを、支えてくださいますように。（一九九六・十二・八）

■家族で唱える■ロザリオの祈りを！■

誰もが唱えるロザリオの祈りこそは、神の民の霊的遺産の中でもひときわ優れたものです。

私の前任者ピオ十二世はロザリオの祈りをとても愛し、「ロザリオは福音書全体の要約である」（マニラ大司教への手紙、AAS 38 [1946], 419）と言っています。

二千年の大聖年に向かう直前準備の年も終わりに近づきました。今年は救い主キリストに捧げられた年です。ここで、教皇パウロ六世が「聖母崇敬についての勧告」で述べたことを思い

起こしたいと思います。「このように福音に基礎を置き、受肉の秘義と人類の贖いを中心にしているロザリオは、全くキリスト論的志向をもった祈りと言うべきです。その特徴である天使祝詞の連祷のような反復は、…誰よりもキリストに近かったマリアの心をもってキリストの生涯の秘義を眺め黙想…することができるでしょう。」（46～47番）

歴史上、とりわけ特に困難な時、何度となく教会はこの祈りに頼りました。聖なるロザリオは戦争の危険を遠ざけ、神からの平和の恵みを得るための優れた手段でした。八十年前、ファチマの三人の羊飼いの子供たちの前に現われた聖なる処女も、罪人の回心と世界平和のためロザリオを要請したのではなかったでしょうか。

恐ろしい戦争と、暴力や紛争の不幸な繰り返しに彩られた今世紀の終わりに、平和への祈りを捧げずにはいられません。紀元二千年に備えるこの数年間の間、聖母のロザリオが全人類の和解と平和を神に願うための助けとなりますように。

しかし世界平和はまた、大人類家族の基本細胞である家庭の平和を通して実現するのです。教会が家庭に特別注目するのはそのためです。

私はもう一度全てのキリスト者の家庭に、ロザリオの祈りを唱えるよう呼びかけたいと思います。そうすれば共にとどまって、私たちの贖い主の喜び、悲しみ、栄えの玄義をマリアと一緒に黙想する喜びを味わい、日常生活の喜びや苦労の時を聖化することができます。共にする祈りは家族の一致と平和と福音への忠実を後押ししてくれるでしょう。

ロザリオの元后マリア、祈る家庭の師、導き手となってください。ロザリオは私にとって特に大切な祈りです。

（一九九七・十・二六、お告げの祈りの時のお話。）

主は赦しを通して語られる

（ブラジル訪問の際、刑務所を訪れた教皇さまは、ローマ帰還後、囚人たちに当てたメッセージを送られた。）

親愛なる兄弟たち。

第2回世界家族の集いの時、私は刑務所におられる皆さんに思いを馳せていました。自由を失った皆さんを見て、心を痛めたことを申し上げないわけに行きません。皆さんの多くの家族の人たちも、時には一家を窮乏から救う唯一の人であるはずの夫や息子の存在をなくしていることを考えると、いよいよ悲しく思います。そこで私は、こんな試練の時にも教会が皆さんの傍らにあることを約束したいのです。キリストは皆さんの側にあって、言葉と友情の誓いで皆さんを支えることをお望みです。

今日、教皇はこの手紙を皆さんに送り、キリストの愛と教会共同体の配慮を証ししたいと思います。キリストと使徒たちは「牢獄」という現実を経験し、聖パウロも何度か捕われの身になりました。イエズスは福音書の中で言っておられます。「あなたたちは私が牢にいた時に訪れてくれた。」（マテオ25・36）イエズスは皆さんの境遇に連帯感を覚え、皆さんと同じ状態にいる全ての人を力づけておられます。

十字架上の死もまた、愛と受け入れの最高の証しです。同じ判決を受けた二人の男の間にはさまれて十字架につけられたイエズスは、悔い改めた善い泥棒に救いを約束されました。「まことに私は言う。今日あなたは私とともに天国にいるであろう。」（ルカ23・43）もう何もかも失ってしまったと感じる人にも自信を与えてくれる限りない憐れみ、並み外れた賜物です。この赦しの行為を通じて、主はあらゆる時代の人々に語りかけておられます。

救いの計画は万人のためのものです。誰もそこからはずされたと考えてはいけません。キリストは、全ての人を親しく知っておられます。キリストの正義はあらゆる人間の不正にまさるものです。その憐れみで、悪と罪を打ち負かされます。主を皆さんの心に迎えましょう！困難を主にお任せしましょう！主は皆さんの重荷を助けてくださいます。心の中でひそやかに、皆さんもリオデジャネイロでの家族の集いに参加することができます。実に、祈りと犠牲と自己刷新を通じて皆さんは、この大きな家族の集いの成功と、兄弟姉妹たちの改心に寄与することができるのです。

この機会に、刑務所長や職員の方々にも激励を送ります。常に人間の尊厳と社会の共通善を考慮し、最善の方法で人々の共存を支援してください。

最後になりましたが、リオデジャネイロの司法当局に感謝を表すると共に、この大司教区の奉仕活動が、人生の困難な時期にある全ての人に人間的な慰めと宗教上の指導を提供し続けることを望みます。

親愛なる友よ。聞いてください。「勇気を出しなさい。主はあなたと共におられる。あきらめないで。この悲しみの時を、償いと内的清めの時とするのです。神や隣人と和解するのです。」特に今、皆さんの側にいる家族や友人、教会の助けを借りて、皆さんが社会の中に居場所を見つけ、良き市民・共通善のため責任を持つ人として社会に奉仕し続けることを期待します。

私たちの母、苦しむ人の慰めマリアの取り次ぎを願い、皆さんと家族の方全員に心からの祝福を送ります。

バチカンにて、九七年九月三十日。

（署名）

不変の教え

●11・5　一般謁見で、聖母マリアについてのカテケージスを続けられる。「めでたし、聖寵満ちみてるマリア…という、天使のお告げの冒頭から取った言葉が祈りの形になったのは、14世紀のことです。これによって信者の心は託身の秘義へといざなわれます。」「お告げの祈りは、神の御旨に常に従順であった聖母に倣うよう、一日に何度も勧めるものです。」「ロザリオの祈りは、マリアへの呼びかけを通じて信仰の秘義の黙想へと導いてくれます。」「マリア信心は、キリスト信者が救いへの道には聖母の存在が必要であると認めていたことの証明です。母であるマリアの心は、子供たちの物的・霊的必要を見過ごすことはできません。」

●11・8　教皇庁医療使徒職評議会が主催した医療関係者の国際会議参加メンバーを迎えて。「人的・経済的資源や技術的な手段の数々が、より公正に世界の隅々まで行き渡るよう配慮されることを求め、緊急の呼びかけをしたいと思います。」「声なき人々の十全な健康促進のため、必要な法的保障がなされるよう、また健康という分野が利益第一に振り回されることなく、連帯と愛の精神で満たされるよう、各国際機関の尽力をお願いします。」「病人の忍耐強い証しは、周囲の人々に病人がイエズスの似姿であることを認識させます。」「身体の健康への配慮は、内的生命と切っても切れない関係があります。教会の歴史の中で、弱く病む人の中におられる神に気づいた人々は、カルカッタのマザー・テレサのように、与えられた能力を生かして限りない愛の証しを続けてきました。」

●11・9　ベネズエラで開催された第七回イベロ・アメリカサミット参加国政府に当てた教皇メッセージが発表された。サミットの中心テーマは「民主主義の倫理価値」であった。「民主主義の前提であり、それを支え養う第一の倫理価値とは、人間には神から与えられた尊厳があり、何者も侵害することはできないと認めることです。それはあらゆる形での人間による人間の支配、独裁、絶対主義や全体主義を排斥します。」「人々が正義、連帯、他者の尊重と言った価値を深く生きるのでない限り、責任をもって共通善に貢献することはできません。」

教皇さまの動き

●11・12　一般謁見で。教皇さまの声の調子がよくなかったので、恒例のカテケージスは他の人に朗読させられたが、謁見の最後にはいつものように自ら各国語で挨拶を述べられた。教皇さまは、英国教会をはじめプロテスタントのある派は聖母の扱いに関してカトリックと非常に近い立場を取っていること、聖母崇敬はカトリックと正教会の大いなる共通点であることに注目し、「マリアの普遍的母性」を強調して教会一致への大いなる希望のしるしであると言われた。「第二バチカン公会議はキリスト者の一致を聖母に託しました。祈りと福音宣教のうちに一致していたキリスト教共同体の始まりを助けたマリアが、今日もキリスト信者の和解と完全な一致のため取り成しを続けてくださるよう、祈り願いましょう。」

●11・13　ポーランドからの巡礼者三百人との会見で、去る六月の祖国訪問を振り返られた。「ポーランドで、私たちは問い返していました。誰が私たちをキリストの愛から引き離せようか？」「今日、世界はますますキリストの愛、昨日も今日もいつも変わらぬ永遠の愛を必要としています。皆さんに繰り返し呼びかけたいのは、この愛の証人になることです。キリストの愛が家庭に仕事に研究に、社会や政治に浸透しますように。その愛が他者の必要に目を開かせ、効果的な助けをもたらす力を増してくれますように。」

●11・15　スペイン司教団を迎え、「スペインの町や村に深く根を下ろした様々な民衆信心には聖体への崇敬、処女マリアへの愛、聖人たちへの敬意が具体的で親密な形を取って表われています。それらがカテケージスの教えから逸脱することなく、キリストの過越の秘義を中心とした秘跡と典礼祭儀への積極的な参加を伴う信仰心となるよう注意深く見守ってください。」

●同日、来年5月の召命祈願日のための教皇メッセージが公表された。「キリスト教共同体が主への全き忠実に生きるなら、召命を増やすことが可能です。」「神を人生選択の周辺部分に追いやってしまう現代、召命がいつの時代にも増して必要となります。」「聖職者、修道者、教師の皆さん、〈全ての人に対して全て〉となるよう一人ひとりを促す霊的・人間的熱意を証しして、キリストの愛を多くの人に届かせてください。皆さんの重要で困難な務めは聖霊への協力であることを忘れないで下さい。若者たちの心から、道の障害物を取り除き、人間的・キリスト教的成長に専念できるよう助けてください。」

●11・16　アメリカ司教総会議の開会ミサが教皇さまの司式で行なわれた。「北米と中南米のキリスト教の歴史を切り離して考えるべきではありません。同時に、〈三つのアメリカ〉それぞれの独自性を守るよう配慮すべきです。地方共同体内での交わりは、主イエズスの唯一の教会における自然な一致を示す、生きたしるしだからです。」

●同日、お告げの祈りの後のお話でペルシャ湾岸危機に言及し、「一般市民、とりわけ子供と病人たちが心配です。主が彼らの運命を握る人々の心を照らし、平和こそ正義を保障する唯一の手段であることを悟らせてくださいますように。」

●11・20　世界移住の日に寄せた教皇メッセージが公表された。「信者にとって、他者を迎え入れることは単に一般的な人類愛にとどまらず、全ての人の中におられるキリストと出会うことです。」「来年は三位一体の三番目の御方、聖霊に捧げられる年です。信者には新たな福音宣教への一層の献身と、異なる文化の国から来た人々を助けて彼らの可能性を伸ばす機会が与えられています。」

「教皇様の声」ヨハネ・パウロ二世教皇の説教、書簡、講話等を解説なしにそのまま伝える月刊紙。■毎月十日発行。■定価　送料とも一部百八六円　■年間定期購読　送料とも一部二、〇八七円。　詳しくは精道教育促進協会まで。

郵便振替
01130-
8-72393